

水本 豪（言語学）

## 幼児の言語理解に及ぼす作動記憶容量の影響

言語発達研究の重要な目標は、人間の生得的能力に基づいて、幼児が各発達段階においてどのような言語知識（言語に関する知識、言語に特化した知識）を獲得しているかを解明することである。また同時に、言語発達の引き金となる要因を明らかにすることも重要な課題である。本論文は、各発達段階における言語知識を正しく抽出するために重要となる、種々の「言語外の要因」の一つとして、幼児の作動記憶容量の個人差が、言語理解の個人差にどのように影響を及ぼしているかを明らかにし、他の研究に見られない独創的な観点から、言語発達研究に重要な貢献をしていると考えられる。特に、幼児の言語理解実験により、作動記憶容量の発達が言語理解発達の引き金となることを示した点は、発達研究の今後の進展に繋がる重要な貢献であると評価できる。

第1部の「問題と方法」では、本研究の目標と方法を明解に示し、言語理解のプロセスにとって作動記憶による情報保持のはたらきは必要不可欠なものであることを論じている。特に、これまで等閑視されてきていた、幼児を対象とした言語理解研究においても作動記憶容量の個人差と言語理解との関係についての実証的な研究が必要であるとの主張は、これまでにない独創的な着眼点であると評価できる。具体的には、作動記憶容量の指標となる、リスニングスペンテストの作成、及びその妥当性調査を実施し、このテストが作動記憶容量の指標として妥当であることを示している。

第2部の「処理済み情報の保持に関する影響」では、幼児が数量詞遊離文を正しく理解できないことが、必ずしも言語知識の欠如によるものとは断定できず、作動記憶容量の未発達によるものである可能性が大きいことを示したものである。また、文脈による理解促進効果の有無について、幼児が理解促進効果を示さない原因についても、言語理解実験に基づいて作動記憶容量の未発達にあることを明らかにした。

第3部の「入力情報の保持に関する影響」では、幼児の格助詞に基づく文理解について考察し、幼児の文理解の未発達は、格助詞に関する言語知識の欠如、あるいは、. 談話構成能力の未発達に還元できると主張する、従来の研究の不備を指摘した。また、格助詞に基づく文理解プロセスを再検討し、作動記憶容量の影響が現れる可能性があることを指摘した。この仮説を実験により立証し、その結果、幼児の格助詞に基づく文理解の可否の原因について、作動記憶容量の未発達が関係することを明らかにした。

第4部の「本論文の意義と今後の展望」は、一連の実験結果を踏まえて、本論文により明らかにされた言語発達に関わる要因について議論し、本研究の当該研究領域における意義と展望を述べたものである。本研究によって得られた一連の実験結果は、当該領域における基礎的研究として重要な役割を担い、また、言語発達研究の今後の進展に大きく貢献するものである。特に、幼児の獲得している言語知識の過小評価の原因となる重要な要因の1つを実験により特定した点、これまでの言語獲得研究の問題点を指摘し、言語発達における重要な言語外要因を抽出しその役割を明らかにした点において、言語発達研究の発展に大きく貢献するものである。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十全な能力を備えていると認めるものである。